

あれ？ハガレン……なのか？

味噌抜き味噌汁

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アニメ一期のハガレンしか見ていない大学生がアニメ二期の世界に転生して勘違いしたりされたりしながら適当に生きる話

それだけです

この話は味噌抜き味噌汁こと私が大学の授業中に眠さで回らない頭で五分くらいで考えた適当な話です

勿論見切り発車です

書き貯めなんてない！

不定期更新だ！

絶対黒歴史になるので一週間後の自分が消しているかもしれない
ん

目次

嘘だろ…	1
長かった…	4
無理だわ、これ…	7
フアツ!?	12
駄目だったか…	19
どうしてこうなった…	23
俺は何も見なかった、いいね？	29
やっこの時が…	35
遂にこの日が来た…	42
逃げるんだよオ!	49
無理ゲーだろ、これ…	54

嘘だろ…

あれ、此処どこぞ？

目を覚ますとそこは自分の知らない場所だった

確か俺は大学の課題が終わって疲れた勢いでそのままベットで寝たはずなんだが

それにしても眠い。瞼が重すぎて全然前が見えない

お陰で「知らない天j…いや、天井すら見えないわ」状態

それに体も全然動かないし、腕とかの四肢の感覚もない
もしかして麻酔か何かですか？人体実験的な？

やばいやばいやばいやばい

俺つてば拉致されたん？もしかしてこのまま寝たら俺の人生終わるん？

うおおおおおおお!! 俺は絶対に寝ないぞおおおお!!!

眠気には勝てなかったよ……



拉致じゃなかった。うん、俺の早とちりだった

でも拉致より奇妙なことが起きた。まさか転生しただなんて誰も思わないだろ

目を覚ましたら目の前には男の巨人の顔があった

驚いて叫ぼうとしたら声が出なくてそのまま呆然としてたらその巨人に持ち上げられた。メツチャ笑顔で

死ぬほど怖くてビビっていたらいつの間にか泣いていた。大学生にもなつて泣くもんじやないと思つて泣き止もうとしたけど何故か感情のコントロールが上手くいかない。もうどうにでも成れとそのまま泣き続けていたら、その巨人が困った顔をして俺を降ろした

よく見ると男の巨人の隣に居た女の巨人が男の巨人を叱っていた

そこでようやく気付いたんだよね

この人達が大きいんじゃないかと俺が小さい事に

そして俺は転生してこの人達が俺の親だつてことに

この時ばかりは前世で小説家に○ろうとかハ○メルンとか読み漁っていた自分を褒めたね。じゃなきゃこの状況を理解することなんて出来なかつただろうし

でも俺は死んでないはずなんだけどな

もし大学の課題なんかで過労死してるんだつたら全人類の死亡原因の五割は過労死になるだろうし。いくら考えても俺に死ぬ要素なんてない

それに神様とかにも会ってない

折角転生するんだつたらチートとか欲しかったんだけどな

まあ、今は前世の事なんてどうでも良い。未練なんてない

よく見たらお父さんもイケメンだし、お母さんも美人だ。これは勝ち組確定ですね

それより問題は此処が日本なのかそれとも異世界だという事

もし日本だとして全く構わないが出来る事なら異世界が良いな。

そっちの方がロマンがあるでしょ

そんな事を考えてるとなんか親がうるさい

何時までも泣き止まない俺をあやそうとしていたらしい。ごめん、あやそうとしていた事にも泣き続けていた事にも気づかなかった

ここは俺のイケメン（予定）スマイルで問題を解決しようじゃないか

「キヤツキヤ」

如何にか赤ちゃんらしく笑うと親は嬉しそうに破顔した

フツ、ちよろいな

それにしてもこの親、俺の行動一つ一つに反応してくる。これはこれで面白い

そんな感じで親を観察しているとまた眠気が押し寄せてきた

赤ちゃんだし仕方ないね

ここが何処なのかは何時か分かるだろうし問題ない

それじゃ、おやすみなさい

長かった…

あれから五年が経った

長かった（遠い目）

あり得ないほど長かった

死ぬほど暇だし、母乳飲むのは恥ずかしいし、離乳食も味しないし
数年前まで散々だったよ、本当に

部屋から一步も出れないからこの世界が何なのか全く分からな
かったし

知ってる？退屈って人を殺せるんだよ？精神的に

だが今やつと俺は普通の飯も食えて不自由無く喋ることも出来る
ようになった。食べれるって、動けるって素晴らしいね

でも一番の成果はここが何の世界か分かった事だ

五歳になって数か月たったある日、庭で走り回っていたらお父さん
に呼ばれた。もしかしてお父さんが大事にしていた花壇を踏ん
じやったことがばれたのかとビビっていたらポケットからチョーク
を取り出して地面に落書きをし始めた。息子に自身の芸術性でも自
慢したいのか？せめて紙に描けよ。貧乏なわけじゃないんだから

だが俺のその考えは直ぐに覆された

全てを描き終えドヤ顔で父さんが振り返る。そこにあつた物は――

「錬成陣」

「おっ、よく知ってたな。流石俺の息子」

一瞬魔法陣かとも疑ったがやはり錬成陣だったらしい

「ならこれからお父さんが何をすることも分かるな？」

そう言うと父さんはズボンのポケットから布の袋を取り出し中身を

錬成陣の上に落とす。袋の中からは何かよく分からない灰のよう
なものが落ちてきて、それが錬成陣の上で小さい山を形成した
。そしてお父さんは両手を陣の上に乗せる。するとチョークで引い
た線が神秘的に光り出した

俺はそれを一瞬も見逃すまいとじつと観察し続ける
。灰は少しずつ揺れながら何かを形成し始めた。そして出来上がった
ものは

「ほら、父さんからのプレゼントだ」

ぬいぐるみだった

ええー(困惑)

錬金術よりお父さんのセンスのなさに驚きだよ

なんで男子にぬいぐるみあげるし。もっと他にあっただろ

それともあれか？本当は息子より娘が欲しかったって遠回しのア
ピールか？

「ありがと、お父さん」

一応例は言っておく

ここで不満を言うのと拗ねて数日口を利かなくなる。何この親、めん
どくさい

話を戻そう

今お父さんは俺の目の前で錬金術を使った。そしてそれはとある
アニメの物凄く似ている

「まさかハガレンだったとはな」

冷静なふりをしているが内心めちやくちや興奮している
。だって錬金術だよ？

両手合わせてパンでドツカーンでバツシャーンで炎はパツチンで
ボアアアアでバリーンなんだよ？↑圧倒的語彙力の無さ

でも訳の分からない異世界なんかより自分が知っている世界の方が断然安心できる

いや、待てよ？ ハガレンの世界って意外とダークじゃなかったっけ？

変なことに首突っ込んで「君のような勘の良いガキは嫌いだよ」ってなったら俺の人生終わる

今から対策するには錬金術に全く関わらない道と錬金術を極める道がある

勿論俺が選ぶのは

「お父さん！僕にも錬金術教えて！僕もお父さんみたいになりたい！」

「ほう、そうなのか。良かろう。お父さんが徹底的に鍛えてやる」

錬金術を極める道だ。折角転生したのに錬金術をしないなんて勿体ない

もうこうなったら国家錬金術師になって原作の出来事を横から映画館宜しくポップコーン食べながら観戦してやる

ん？原作介入はしないのかって？

馬鹿野郎！あんな精密に書き込まれた物語に俺という異物が入ったらどんな化学反応起こすか分かんないだろうが！原作通りのハッピーエンドにならないかもしれないんだぞ！

っていうのはただの建前で痛いのが嫌なだけです、はい

それにしてもお父さん、少し褒めただけでデレデレしやがって

フツ、ちよろいな（二回目）

この日から俺は念願の錬金術を習う事になった

無理だわ、これ…

はい、どーも

めでたく数か月前に7歳になりました

いやあ…：エルリック兄弟って天才だったんだね。伊達にアニメで天才天才連呼していたわけだ、うん

というのも今現在公園の砂場で錬金術の練習してるんだよ。訳わかんない程むず過ぎて目が死んでるけど

お父さんに錬金術を見せてもらった日から錬金術を習う事になった

だから物凄く期待してたんだよ。だって錬金術だよ？両手合わせてパンでドツカーンでバツry)

だがそんな俺の期待は見事に裏切られた

お父さんに付いてこいと言われて家の書庫に行ってみると六法全書みたいの厚い本をドーン！って出された。

え？これを全部読めって？嘘だろ？この本でお前の頭ドーン！つてしたるか？（#^ω^）ピキピキ

適当にめくってみたら小1から高3までの科学っぽいのがずらーつと書いてあった

でもよく考えてみれば当たり前だよな

錬金術の過程は理解↓分解↓再構築のわけだから理解してなかったら何も始まらない。エドワードもグリード倒すときに炭素がなんちやら言ってたしね

でも当時五歳児の子供にこれ読めって言ったって無茶ぶりだろ。文字が読めるだけでも褒めて欲しいぐらいだ

だが俺も伊達に転生者している訳じゃない

錬金術がしたいという熱心だけで最低でも8年は掛かると言われている六法全書モドキを2年でマスターしてやった。これには流石の親も言葉を失った

でもエルリック兄弟って7歳ぐらいの時にはもう錬金術使ってたよね？確か、ウィンリイにぬいぐるみ作ってあげてたよね？ウィンリイ泣いてたけど

エルリック兄弟バケモノかよ（冷や汗）

7歳ぐらいで高3までの科学コンプリートしたとか絶対同じ人種じゃないね。流石は主人公というかホーエンハイムの息子というか

まあ、そんな訳で錬金術の過程の理解は完了したわけだけど俺は次の分解の過程で大きな壁にぶち当たっていたそれは――

「丸が描けねえ……」

完璧な円が描けないのだ

どう頑張っても円を描いても潰れたアンパンみたいになる

アニメ見ている時にはアニメだから仕方ないと思っただけど、それが現実にもなるとか冗談じゃない。だってうちのお父さんが腕グルンって回しただけで綺麗な丸が出来るんだよ？

俺にもそんなアニメ補正があると信じてやってみたが、そんなものがある訳ないだろ

仕方ないので枝分かれした木の棒でコンパスの様にして円を描いた後に中に線と文字を書いて錬成陣を完成させる

コンパス使うなんてかつこ悪いなあ

だって国家試験の時に皆素手で書いてる中で俺一人だけコンパスで円書いてるとか一発で脱落だろ

何かいい方法はないかと悩んでいるその時

「その貴方、何をしているの」

後ろから声がした

振り返ると同じ年ぐらいの女の子が立っていた

でも流石はアニメの世界だ。通りすがりのモブ子すら可愛いとは。整った顔に鋭い目つき、さらには金髪まで。大きくなった絶対に美人になるだろう

俺は彼女の質問に錬成陣を指差すことで答えだ

「ほう、錬金術か。上手く書けてるな」

「いやそんなことはない。全然だ」

俺は彼女の称賛を否定した

だってコンパス使ってるし。

「ん？そんな事はない。その年でこれほどの物が書けるならすごい事だろ」

「いや、違うんだ。俺が求めているのはこんなじゃない」

何時までのコンパスに頼ってられない。コンパスを使った錬成陣なんて俺が認めない

だから早くコンパス抜きで書けるようにならないと
ていうか此奴やたらと上から目線だな

「そうか。面白い。お前、名前は何だ？」

「……人に名前をk「私の名前はオリヴィエだ」……俺はローガンだ」

因みに家名はヴァーミリオンだ。メツチャ中二つぽい名前だろ。
だがそこにシビれる！あこがれるウ！男心を擦るわけだ

「そうか。おっと、私はそろそろ行かないといけない。ローガン、また
会おう」

「お、おう。じゃーな」

そう言うとな彼女は公園を出て行った

「はあ〜」

同世代の女の子と喋るといいう高難易度のミッションをクリアした
俺は溜息と共に空を見上げた。その時に俺はやっと空がオレンジに
染まってきているのを確認した

「やっべ、早く帰らないとお母さんに叱られる」

門限は6時まででって決まってるんだよ

うちのお母さん怒ると死ぬほど怖いんよ。勿論、お父さんはお母さ
んの尻に敷かれてる

内の家系の男は女には逆らえない血筋らしい

俺は足で適当に錬成陣を消して公園を離れる事にした

この日、俺は結局6時に間に合わずお母さんの後ろに修羅が現れた

その様子を見て逃げたお父さん、俺を見捨てたあんなだけでは許さん

フアツ!?

偉そうなモブ子との邂逅と修羅になったお母さんの出来事から一週間ぐらいたったある日、俺が部屋で永遠に丸描く練習してたらお父さんが部屋に入ってきた

お父さんの顔を見て何となく察した。今からめんどくさい事が起こると

お父さんは俺の顔を確認すると

「今から友人の家に行く。そこでローガンを紹介するから正装してなさい」

それだけ言って部屋を出て行った

今更だがうちの親父コミュニケーション下手じゃね?ちゃんと部下と会話できてる?……無理だな

でも何時もあんな高圧的な態度だけどハートは豆腐並みに脆いんだよ、あのおっさん

偶に部下が自分の陰口言ってるの発見すると帰って来て酒飲みながらお母さんに励まされているよ。お母さんもそのギャップに惚れ込んだんだろうね。じゃなきやあんな美女引っ掛けられる訳がない

お父さんに言われた通り正装して待っているとお父さんに呼ばれて車に乗り込んだ

思ったけどハガレンの世界の科学の水準って曖昧だよな

家の中は暖炉とかランプとか使って中世みたいなのに普通に車とかあるし。オートメイルなんて前世でも無かったんじゃない?

そんな無駄なことを考えてると車が止まった

車を降りて目の前に現れたのは公爵でも住んでいそうな馬鹿でかい屋敷だった

え？本当にここであつてる？目的地間違つてない？
うちのお父さんがこんな金持ちとのコネがある様には見えない
だけど

そんな疑惑の視線をお父さんに向けると俺の困惑の表情に満足し
たかのようにニヤリとニヒルに笑つた

人は見た目に因らないとはこの事だな

メイドたちに案内されながら進んでいくとある部屋に入らされた
そこで待つていた人を見て俺は分かっちゃつたんだよ。ここが何
処なのか

ごつい体型、クルリとカーブした前髪に、モアイが髭を生やしたよ
うな顔

まさかのアームストロング邸だった

おい、くそ親父!!なんてとところに連れてくんだ!

こんな筋肉が服着てるような奴らの巣窟なんて来たくなかつたわ
!

今からでも帰っちゃダメ?.....ダメですか、そうですか

え?今から昼食を一緒に取るつて?もしかして全ての料理にプロ
テインとか入つてないよな?

おい、なんで目逸らした?何で逸らした!!!

駄目だ、帰ろう。.....おい、親父。なんで俺の腕を掴んでる?

え?帰らせないつて?放せ!俺は今すぐ帰んだ!HA☆NA☆S

E

ヤメロオオオオ!!!!!!俺はあんなゴリマッチョにはなりたくな
いんだああああ!!!!!!

料理メツチャ美味そうじゃん。流石は金持ち

さつきまで嫌がってなかったかって？そんな訳ないだろ、やだなー

(棒)

料理がすべて運ばれてくるとアームストロング氏は何かを思い出したかのように顔を上げた

「おお、そういえば忘れておった。私の子供たちを紹介しよう。入っ
てきなさい」

モアイがそう言うのと彼の左のドアが開き二人の子供が入ってきた

その内の一人は三歳ぐらいの男の子でモアイと同じく金髪碧眼
だった

そしてもう一人は

「フツ、よく来たなローガン」

「なんでお前が此処に居る、オリヴィエ」

まさかのオリヴィエだった

お前通りすがりのモブじゃなかったのかよ。村人Aじゃなかった
のかよ

「そういえば言っただけだったな。私はアームストロング家長女、オリ
ヴィエ・ミラ・アームストロングだ」

アームストロング家の娘だなんて聞いてねえよ

てかアームストロング家にオリヴィエなんて娘いたっけ？もしかして時系列が違うとか？原作の過去だったり未来だったり

「そして長男のアレックス・ルイ・アームストロングだ」

俺が悩んでいるとモアイが男の子の方を紹介していた

……過去だったね。ほんの少しだけ

てかこのシヨタつ子があのアームストロング少佐かよw

こんな可愛い子があんな筋肉になるなんて分かったら全世界のシヨタコンが泣くぞ

俺がそんなどうでも良い事で悩んでいると、隣で親父が爆弾を落とすやがった

「言って無かったけど、オリヴィエはお前の婚約者だからな」

「……は!？」

爆弾は爆弾でもツアーリボンバだった

オリヴィエ side

昔から私に婚約者がいることは知っていた

だが私には婚約者の事など興味が無かった。それがあの有名なヴァーミリオン夫婦の子息だとしてもだ

だから彼に会ったのは完全に想定外だったと言える

その日私はお父様のむさ苦しい訓練に飽きて家を抜け出し町に繰

り出した

普段よく下町に行っていた私にとって見慣れた風景が広がっていたがたった一つだけ違う点を見つけた

何時もなら子供たちが遊んでいるはずの公園の砂場に私と同じ年ぐらいの男が居座っていた

何をしているのか確認しようとその男に聞いてみると彼が砂に描いたものを指さした

そこにあつた物は錬成陣だった

その錬成陣は線と模様だけではなく文字まで使った高度な錬成陣だった

だがその事を褒めた私に彼はこう言った

『俺が求めてるのはこんなんじゃない』

それを言う彼の顔は悔しきでいっぱいになっていた

成人でも難しいはずの錬金術を使い高度な錬成陣を描けるのにもかわらず彼は満足できないらしい

おもしろい

私は気になり始めた。彼の頭にはどんな思考が広がっているのかと。

それはさぞ凡人では考え付かない事だろう

ここで別れてしまうのは勿体ない。そう思っ私は彼に名前を聞いた

だがそれは予想外にも私の婚約者の名前だった

だがその名前を聞いて私は納得した。かのヴァーミリオン夫婦の息子が凡人のはずがないと

(お父様もこんなに面白い男ならさっさと紹介すれば良いものを)

婚約者と分かった時点で大きな収穫だ

このまま分かれてもいつかは確実に顔を合わせられる日が来るだろうと

そしてその日は意外にも早く一週間後にやってきた

私の顔を見たローガンの顔は私の予想通りに驚いていて笑いを堪えるのがやっとだった

だが私が名家であるアームストロングの娘だとして彼は態度を変えなかった。ほかの人なら不愉快かもしれないが私はそれが愉快で仕方なかった。上の人に媚びを売る人より断然いい。実に私好みだ

彼の父親からの話に因ると彼の部屋は彼の描いた錬成陣で壁一面が埋まっているという

才能だけではなく努力も出来るとはますます私好みだ

実にいい拾い物した

ローガンを見ると運動はしてないのか筋肉はないが、それはそれで私の好みに彼を訓練させることが出来るという事だ

フッフ、今から楽しみだ

S i d e o u t

ゾクツ

なんで、今の？なんか鳥肌がやばいんだが

辺りを見渡すとオリヴィエが俺を睨みながら笑っていた。さつき

の嫌な感覚は彼女からか

気分はまさしく肉食獣に睨まれた草食動物だ

俺なんか悪い事したっけ？

あつ！そういえばアニメでアレックス・アームストロングの妹がアレックスみたいなのムキムキな人が好きだって言っていたな。つまりゴリマツチヨじゃない俺と婚約なんて御免だという事か

それにしてもアームストロング家の長女と婚約なんてしているのか？そんなことしたらタイムパラドックスとかで原作が歪んだりしないか？

いや、大丈夫だ。オリヴィエは一度もアニメに出ていない。だから俺が彼女と婚約しようがしまいが原作には影響がない……はず

まあ、婚約でもしないと俺に彼女が出来る確率なんて皆無だろうし。だからたとえオリヴィエが俺を嫌っていてもこんな美女と婚約しているこの時を楽しもう

逃したらもう二度と彼女なんて出来ないだろうし

駄目だったか…

どうも皆さん、この前八歳になってやっと丸が描けるようになったローガンです

あり得ないほど丸ばつか書いてたからね、うん

どの位かというと部屋に入ってきたお父さんが壁に貼られてた俺の錬成陣の量を見てドン引きするくらいに。そんなくらい書けば上手くもなるよ。逆にならなかったら困る

でも最近思う事が一つあるんだ

丸書く練習する必要なかったんじゃないかね？って

今更思えばアニメでも一々錬成陣描きながら戦ってた奴なんて一人も居なかった気がする。皆手袋に錬成陣描いたり掌に入れ墨していたはずなんだよね

……………

うおおおおお!!時間無駄にしたああああ!!

毎日欠かさず書き続けていつの間にか丸だけ描く機械みたいになるほどの俺の努力を返せええ!!

いや、待て、落ち着くんだ！ポジティブに考えろ

国家試験の時には使うだろう？そうだよ、受験勉強だと思えば時間の無駄じゃなかったんだ！

あれ？そういえばエドワードは手合わせ錬成してたような……

……………

やめよう。これ以上考えると鬱になる

別の事を考えよう

そういえば今まで錬成陣を描くだけで錬成したことはなかったな
最初は親が許してくれなかったんだよ。危ないから
でも流石にもう大丈夫でしょ。錬金術習い始めて三年も経つんだ
から

という訳で親に聞いたなら一発OKもらった

逆に今までしてなかったのかって言われた。俺もそう思うよ。あんなに錬金術やりたいオーラ出してた子がお絵かきに夢中になってりや誰でも疑問に思うわな

そんな訳で庭にやってきた

今回は簡単な実験みたいなモノだから材料は灰だけにする
これを錬金術で固めて芸術的なオブジェを作ろうという訳だ

俺は地面に座りこみお父さんから借りたチョークで地面に錬成陣を描く

そしてその上に灰を乗せて後は錬成するだけだ
緊張と歓喜が混ざり合って不思議な気分になる

「やっとこの日が来た！」

たぶん俺の顔はにやけて気持ち悪いだろう

だけど仕方ないだろう。夢にまで見てきた錬金術が今日の前で行われるんだ、俺の手で

はあ、と深呼吸をする

知識も十分、錬成陣も大丈夫、イメージも出来てる
完璧だ。否の付けようがない

膝をついてゆっくりと手を錬成陣に近づける
あと十センチ、瞬きすら出来ない
あと五センチ、汗が額に流れる
あと一センチ、手が震えてきた

そして手が錬成陣に着いた瞬間、蛍光色の光が俺を包み込んだ
錬成陣をなぞる光と共に中心にあった灰がゆらりと動き始める
そしてそれは徐々に形を形成し始める
そして動きが止まった
そこには前世で俺が好きだったロボットが鎮座していた

「完璧だ…」

思わず口から感想が漏れる
俺の思った通りの物が出来た
俺は数秒ほど感動に浸ると完成したロボを手に取りようと立ち上がった

だがおれが錬成陣から手を離れた瞬間、ロボットが崩れ落ちて元の灰に戻った

「はっ…」

その余りの光景に言葉を失う
何か忘れていたつけ、俺？ちゃんと固まったはずだから崩れる要素なんてないはずなんだが

その後いくら試しても最終的には崩れてしまった
材料を変えても、作るものを変えてもその結果は変わらず、崩れ落

ちる

崩れ落ちる原因は一切分からない

つまり――

俺には錬金術の才能が無い

どうしてこうなった…

あれから色々試してみた

材料を変えてみたり、場所を変えたり、錬成時間を延ばしたり、錬成陣を変えたり……

思いつくありとあらゆる方法をやってみた

理解、分解までは完璧に出来る。問題の再構築では俺が手を離れた瞬間にまるで元通りに戻ろうとするかの様に弾きあつて崩れ落ちる形が無い炎はどうかと思つてマスタングの錬成陣を描いて試した。周りから酸素を集めることも出来たし摩擦を作ることも出来たが、炎という結果は生まれなかった

正直何が起こつたのか見当がつかない。アニメではこんなこと一度も無かつたし

結局、この実験で分かつたことは俺の錬金術は完全に完成されない中途半端なものだという事

べ、別に悔しくなんてないよ

前世でも才能なんて米粒ぐらいもなかったし

ただハガレンの出来事を横から見れるだけでも十分満足だし、うん

あれ、何でだろう？雨がしよっぱいな……

そんな感じでくよくよしてたら一か月も経ってしまった

そして俺は何をしているかというところ――

「なに考え事をしているー！」

シュツ

「うお！危なっ！」

アームストロング家で剣術の訓練してます
どうしてこうなった。いや、ホンマに

事の発端は一時間前

錬金術失敗に心が折れて部屋に閉じこもっていた時にお父さんが
部屋に入って来て

「オリヴィエが会いたいらしい。今からアームストロング家に行つて
きなさい」

とだけ言つて部屋を出て行つた

え？オリヴィエが俺に会いたいって？もしかして……

落ち込んだ俺を励まそうとしているのか？

流石俺の婚約者だ！俺は幸せ者だな、本当に……

なんて考えてた時期が俺にもありました
アームストロング家に到着したら玄関で待っていたオリヴィエに
真剣渡されて

「ついて来い」

と言われてついて行つた先の広場でいきなり剣の打ち合いを始め

た

本当にどうしてこうなった

俺の予定では婚約者とイチチャラブするはずだったんだけどな……

いや、脳筋のアームストロング家の娘に期待した俺にも非は有るけどさ、期待ぐらいしても良かっただろ？

てかつい一時間前まで引き籠っていた奴に真剣はキツイって

見てみるよ。剣が重くて剣先がプルプル震えてるだろうが

というか打ち合いの前にもっと他にあるだろ？素振りとかさ

「実戦に勝る訓練は無いと言うだろ？」

いや、そうだけど、そういうのは基本を終わらせた奴にしか適応されないんじゃないか……

ん？なんだって？ここはアームストロング家だから問題ないって？

……その一言で納得してしまう自分が憎いわ！流石アームストロング家、常識が通じねえ

今はオリヴィエが手加減してくれてるお陰でギリギリ避けてられるが俺の貧相な体力でどこまで持つのやら

「ほう、また考え事か？ならギアを一つ上げても良いという事だな？」

言った傍から手加減なしかよ！

うおっ！危なっ！てか、掠ったよ今！死ぬ！死んじやうって！あべしっ！

どうにかオリヴィエの剣を受け止めたが余りの重さに剣を放して

倒れ込む

なにが起きたか分からず目を開くと影差し込んだ。気が付くと目の前にオリヴィエが立っていた

「まだ落ち込んでるのか？」

「何がだ」

「錬金術の事だ」

「ッ……」

凶星を突かれた、というか誰が見ても俺が落ち込んでいる原因はそれだけか

「諦めればいい」

「は?!」

「時間の無駄だと言っている」

これは流石にカチンときた

俺がただだけ錬金術に憧れたと思っている?!

アニメを見て感動した俺がどれだけ錬金術ごっこをしたかを

スケッチブックを錬成陣で埋め尽くして親に生暖かい目で見られたことを

……ここで『三年間俺がただだけ……』とか出てこない辺り、俺も相当参ってるな

「でも諦めきれないと思ったら最後までやり切れればいい」

「え?」

「お前に才能が無くともお前の努力は何時か廻り回ってお前に戻ってくる。お前の努力が無駄になる事はない。それに——」

そこでオリヴィエは今までに見たことも無いほどの笑顔でこう言った

「もしお前が諦めても私が養ってやる。婚約者一人の面倒を見れないほど我がアームストロング家は落ちぶれてはいない」

俺は彼女のその笑顔に見とれてしまった。お前、こんな表情も出来たのか

それにまさかオリヴィエに慰められるとはな。普通逆だろうに

「男の俺が言いそうなこと全部言われたな。これじゃ俺に立つ瀬が無いじゃないか」

「それはお前がだらしないからだろう。もし悔しかったら私が惚れる位の良い男になってみる。それぐらいなら待つてやる」

何とも男勝りな答えだな、ちくしょう

「俺に…出来ると思うか？」

「それはお前次第だろう？何を言っている」

「ハハハッ、そこで勿論と言わないのがお前らしい」

でもお陰で立ち直れた
今なら何か掴めそうだ。

「俺、やってみるよ。折角なんだ。この際、全ての錬金術の知識を極めてやる。それで駄目なら科学者にでも成ればいい」

「それでこそ私の婚約者だ。私を失望させるなよ？」

俺は拳を握りしめて誓う

最低限オリヴィエの期待には応えないとな。それじゃなきや慰めてくれたオリヴィエに向ける顔が無い

それにしてもお前本当に八歳か？考えてることが熟練のおばさんだぞ

もしかしてお前も転生者か？それならアニメに出てこないのも納得できる

でも

「本当にいい女だ」

俺には勿体ない位にな

彼女が何者だろうが俺は彼女に報いたい

彼女の隣に立てるようになる事、それが俺の次の目標になった

「期待してろよ？俺がお前の婚約者だって事を誇りに出来るようにしてやるからな」

俺は何も見なかった、いいね？

オリヴィエに励まされたあの日から俺はさらに頑張るようになった

理由としてはオリヴィエの仏頂面を驚愕させてみたいとか、オリヴィエに褒められたいとか……

つまり惚れてしまったんだよ、オリヴィエに。まさか俺がこんなチヨロインみたいな惚れ方するとは思わなかった

昔はアニメ見ながらこんな人は絶対居ないって高を括っていたけど、人間何が原因で恋に落ちるかなんて分からない。今まで心の中で馬鹿にしてたチヨロインの皆さん、すんませんした

でも今思えばオリヴィエのあのセリフが咄嗟に出てくるわけがない。多分事前に考えていたはずだ。部屋でどうやって俺を励まそうかと悶々と悩むオリヴィエを妄想するとメツチャ萌える

……重症だな。もうどうしようもねえ。えーりんも匙を投げるほどの末期だ、これ

話が逸れたな

オリヴィエに励まされて俺は出来るだけ錬金術の知識を蓄えようとした。いくら勉強しようが錬金術が成功することはないだろうが何もしないよりは遥かにましだし、もしかしたら何かの突破口が見つかるかもしれない

でも書庫にずっと引き籠っている訳では無い

午前中には書庫で勉強をして午後にはアームストロング邸に行つてオリヴィエと特訓してる。特訓と言っても唯俺がオリヴィエにフルボッコにされるだけだけだな

そんな感じで毎日充実に生きていたらいつの間にか十五歳になつていた

七年の修行のお陰である程度強くなれた：はず。今ではオリヴィエと本気で試合しても一撃も攻撃を喰らうことはない。当てたこと

も無いけど。

それに錬金術の知識もそれなりに学べた。錬金術は未だに出来な
いけどね。でも何とか突破口を見つけることが出来た。これが出来
れば国家錬金術師にはなれるだろう。でもこの突破口というのは勉
強したものから来たんじゃないくて、前世で見たハガレンのワンシーン
からアイデアを得ただけだけどね。この時だけはアニメオタクだっ
た前世の自分を褒め称えたね

因みに国家錬金術師になれたらオリヴィエにプロポーズしようと
考えてる。七年前のあの時に「私が惚れる位の良い男になってみる」
なんて言われちゃ男としてビッグな事をしなきゃいけないでしょ。
あのオリヴィエもまさか俺が国家錬金術師を目指すとは思わないだ
ろうから彼女に銀時計見せたらきつと驚くはずだ。そんな妄想をし
ながらニヤニヤしてたらオリヴィエに「キモイ」って言われて手に
持っていた剣で切腹しようかと悩んだのはいい思い出だ

待ってるよ、オリヴィエ!!俺が迎えに行くからなああああああ!!

!!

：また話が逸れちゃった。オリヴィエの話になるとどうも自制が
利かなくなる。末期だなあ

そんな訳である日、書庫に行ってみると事件が起こった

そろそろ全ての本を読破するなど考えながら読む本を探している
と本棚の奥の壁に不自然なくぼみがあったんだよ。不思議に思っ
てそのくぼみを触ってみると何かのスイッチだった様でカチツとい
う音と共にくぼみが押し込まれたんだよ。するとすぐ横に小さな扉が
出てきた。まさかの隠し扉という男心擦る出来事に興奮のままにそ
の扉を開けた

その中で俺は見てしまったんだよ

親父の隠していたエロ本の数々を

それを確認した瞬間、俺は扉をそっ閉じした

親父の性癖なんて一ナノメートルも興味ないからね

だが数日後、俺はまたその禁断の扉を開けてしまった

いや待て！石を投げるな！言い訳をさせてくれ！

この世界って性欲を発散する手段が少なすぎるんだよ。ネットも無いし

それに俺も男の子だ。親父の性癖に興味はなくともエロ本自体には興味がある。おっと、そこで「精神年齢は……」なんて言うのは野暮ってもんだぜ。男なんて万年発情期だし

俺はそつとエロ本を手に取った。こういう時ってやたらと五感が敏感になるよね。家鳴りにもビビっちゃうし

そして俺はエロ本を開いた。この時俺は今までに無いほどこの世界に複写技術があることに感謝した。俺は無我夢中にエロ本を読んでいた

そこで俺は何かの違和感に気付いた

普通なら感じる事も無くスルーするはずだが五感が敏感になっている俺にはその違和感を感じ取れた

その時俺は思い出したんだよ。マルコーが自分の研究書を料理本に偽装していた事を

もう一度注意深く本を見ると確かに錬金術について書いてあった
確かに研究書をエロ本に偽装したのは正解かもな。俺も最初見た時にそっ閉じしちゃったし

親が国家錬金術師だって事は知っていたが何を研究していたかは教えてくれなかった。だがこの本を解読すれば何を研究していたのか分かるはずだ

俺は後でゆっくり読むために解読した奴を別の紙に写した。勿論日本語でだ。この世界で日本語を未だに見たこと無いから解読されることはないだろう。それにもう読む本もそろそろ無くなってきた

丁度いい

こうして俺は親の研究所の解読を始めた

…傍から見たらエロ本を書き写す危ないガキに見えるだろうな



解読を初めて一年が経ち俺は十六歳になった。

そして親の研究書の解読が終わって、その全貌が明らかになった

「……まさか人体錬成を研究していたなんてな」

まさか自分の親が錬金術の禁忌に手を出していたなんて予想出来る訳もないだろ

この研究所って軍に提出しているのかね？そんな訳ないか

こんなエロ本に偽装する位だ、提出しているはずがない

もしこれが軍に見つかったらうちの家ヤバくね？

そんな事を考えながらゆっくり解読したものを読んでいるとある文章が目に入った

「人体錬成で錬成された物は決して術者の蘇生対象の肉体になることはない」

ん？これは一体どういうことだ？

この文章によると俺がもし親父を錬成しようとしてもその肉体は親父の物にはならないって事か？いや、可笑しい。そんな筈はない。だってそれだと――

ホムンクルスはどうやって生成される？

ホムンクルスは陣錬成の失敗体に不完全な賢者の石を与えることで出来る者じゃないのか？

前提が完全に崩れてしまった。もしかしてこの世界にホムンクルスは存在しないのか？

いやそんな筈はないだろ

この国の大総統はアニメ通りキング・ブラッドレイだし。彼がホムンクルスって保証は無いけど何の理由も無く眼帯付ける必要も無いよね？

それに賢者の石のせいで滅びた国の伝説もあつた。確か国の名前はクセルクスだったかな？アニメには名前までは出てきて無かつたからな。つまり何者かがその国の人間を使つて賢者の石を作つたつて事だ。たとえばホムンクルスが居なかつたとしても黒幕のダンテさんが居るのは間違いない

何にしろ楽観視は出来ないつて事だ

そしてこの世界は俺が知っているハガレンの世界とは違う可能性がある。もしかしたら俺の一番の切り札である未来が分かると言う物はもう使えないかもしれない

困つたな

アニメのイベントをポップコーン食べながら見学することが出来なくなるかもしれないなっちゃった。イベントが変わるかもしれないしね

溜息しか出てこねえよ、まったく

「それで、さつきからエロ本を見ながら何を頷いているんだ？」

「えっ？」

誰も居ないはずなのになぜか後ろから声がした

ゆっくりと後ろを振り向くと

「ななななんでお前が此処に居る、オリヴィエ」

「お前が何時もの訓練に来ないから迎えに来た。でもまさか訓練に来

ない理由がエロ本を読むためだったとは」

俺の婚約者殿が後ろで仁王立ちしていた
最悪だ。一番見られちゃいけない場面を見られた
やめろ！そんな憐みの眼で俺を見るな！

「待て、オリヴィエ。これには理由が——」

「お前が男故にそういう物に興味を示すのは知っている。だがほどほどにしろよ？」

それだけ言うとオリヴィエは書庫から出て行った

誰か……俺を……殺してくれっ！

やっとこの時が…

あの後、俺は虚ろな瞳で手に持ったナイフと自分の腹を交互に見ている所を親父に見つかり無事保護された。本当に助かったよ、親父。あの時は自分でも何しでかすか分からない状態だったからね

保護された後、俺はオリヴィエの家には行かずに家で国家錬金術師になるための練習をしていた

ん？エロほん…：人体錬成の研究書はどうするのかって？

別にどうもしない。俺は錬金術使えないから関係ないしね。一応、日本語で写したし何時でも読めるけど。一番の懸念は国にバレないかという所だけど、あれじゃエロ本バレることはないでしょ。もし見つかったもそつ閉じするだろうし

俺にとつてはそんな事より国家錬金術師になる方が大事なんだよ

この前、如何にか抜け道を見つけて国家錬金術師になれる可能性を掴めた。だけどその制御がやたらと難しい

だから今は一刻も時間が惜しい

何でそんなに頑張るのかって？

早くオリヴィエと結婚したいからに決まってるんだろ！



あれからもう既に六年もたってしまったって

時間が過ぎるのが早すぎるって？いや、だつて、ただひたすらに錬金術の訓練したりオリヴィエとイチヤ斬りあっていただけだよ？

でもそのお陰でどうにか俺の錬金術が完成した

そして今日は国家錬金術師になるための試験がある日だ

いやあく晴天で正に試験日和だね、うん
家もセントラルにあるから試験会場まで近いし慌てる必要もない。
落ち着いて行こう

そして試験会場に着くと俺が最後の一人だった様で入ったらずぐに試験が始まった

それにしても凄いね

アニメを見ている時にも思ったけどどうやってこの大自然を毎年再現してんだろ？ 国家錬金術師を選抜するだけでこんなに金をかけるなんて国も本気だつて事だよ

そしてアニメ通り我らが大統領が視察に来ている。それに気づいた人たちはより一層緊張していた。俺は分かっていたから違うけど周りの人たちは次々と錬成を始める

皆ありったけの材料を使って強大なものを錬成している
さて俺も始めるか

アニメのシーンを思い出してこの試験はインパクトが重要だと俺は踏んでいる。出来るだけ派手なものを出して大統領の目に留まれば万事解決なのだ

そして俺が見つけた錬金術の突破口はこの条件に合致する
「これ以上オリヴィエを待たせる訳にはいかないしね」

俺は大きな深呼吸をし、用意していた錬成陣の刻まれた手袋を嵌める

後は大統領が通るのを待つだけだ

S i d e キング・ブラッドレイ

今年も無事に試験を行う事が出来た

天気も良く実に試験日和だ

この試験は国の軍事力を上げるための大事な試験だ。そのため金の出し惜しみはしない

だがこの試験にはもう一つの目的がある

それは人柱候補を探すことだ。真理の扉を見ても生還し得る人材

を我らが父が望んでいる

だがそんな都合よく候補が現れることはなく心中溜息を吐く

(今年もハズレか)

今年も適当に選ぼうと考えてると一人の青年の姿が目にと留まった二十歳ぐらいの青年がずっと鉄の山を見ながら微笑んでいるのだその少年に少し興味が出たので話しかけてみることにした

「君は錬成はしないのかね？ほかの受験者はもう始めているだろう」

「おっと、大総統閣下ですか」

いきなり私が声をかけたのにも関わらずこの青年は飄々と答えた「俺は閣下を待っていただけですよ。直接見ていただきたかったのだ」

そういう少年の眼には自信で溢れていた。そしてその表情は悪戯を仕掛けた子供の顔のそれだった

面白い。実に面白い

他の受験者の錬成を見ても自信を失わないどころか逆に自信に溢れている

「よろしい。ならば私が直々に君の錬成を見てみるとしよう」

ならば見せてもらおうか。お前の錬成を

私のセリフに彼は悪戯に成功した少年の如くニヤリと笑った

青年は私に手袋の錬成陣を見せるとその手で鉄の山に触れた。するとその鉄から錬金術独特の光だ発し動き始めた。自然の法則に逆らった動きをする鉄はやがて立派な龍の形になった

そこで私は異変に気付いた

何時まで経っても錬成が終わる気配が無い

何事かと青年を見ても何事も問題ないかのように錬成を続けている

龍に変わった鉄の方を再び見るとやっとこの青年が何がしたいのか理解した

鉄の龍がまるで生きてるかの如く動いているのだ

胴体はまるで筋肉が有るかの様にくねり、その表情は本当に感情が有るかのように私を睨む

その小さな動作一つ一つが命無き鉄に命を吹き込んでいる

その龍は私に近づくと威嚇するように口を開く

その様子に思わず目を開くと青年は私の反応に満足したかのように再びニヤリと笑う

「ほう…これは何かね?」

「これは俺が発見したもう一つの錬金術の在り方です。俺はこれを『流体錬成』と呼んでいます。如何でしたか?」

流体か…

確かにに的を射ている

錬成という凝り固まった常識を打ち破り常に錬成をし続け形を変え続ける新しい錬金術の在り方。実に若者らしい考えだ

だが同時にこんな若者では出来ないような神業でもある

どれだけの才能と努力が合わさればたったの二十歳でこの境地に立てるのだろうか

私はその少年に笑顔で答えた

「素晴らしい出来だよ。感動した」

これで今年的目標も達成したな

軍事力の強化も、人柱候補も

S i d e o u t

こういうのは多く語らないが得策だと俺は思う

相手が勝手に想像して勝手に勘違いするように仕向けるのだとか偉そうに言ってみたが実際やったのはとても簡単な事だ

錬成止めずに続けるだけ

これに思い付いた理由はアニメでエドワードがウィンリイにぬいぐるみを錬成してあげたあのシーン。あのシーンで錬成陣の上の材料が重力に逆らいながら動いて、それを見たウィンリイが怖がって泣いていたのが印象的だった

それを見て俺は思った

『錬成し続ければ物を宙で自在に動かせるんじゃないか?』と

これならば錬成を完成させる必要もないから俺にはぴったしだ
それにもし本当に出来ればなんか中二病ポイのが色々できるはず
なんだよ。男に生まれたならやるしかないでしょ

と煩惱丸出しで訓練を始めた訳だがこれがそう上手くいかない
錬金術の過程である理解、分解、再構築の中で術者は自分が素材を
どう錬成したいのか鮮明にイメージしないとイケない。それは勿論
俺の流体錬成でも違いはない

だが問題はイメージするのが動いているモーションではなく止
まっている一コマずつだという事だ。つまり頭の中で常に自分が錬
成したい物のイメージを変えなければならぬ

言うのは簡単だが実際にやってみるとこれがあり得ないほど難し
い

次のイメージを考えるのが遅かったりイメージが鮮明じゃないと
思った様にスムーズに動かない

ただこれだけの為に六年もかけたと言えどんだけ難しいか少し
は分かるはずだ

まあ、大總統の顔を見るか限り俺の努力は報われたと思っても良い
だろう

オリヴィエに良い報告が出来そうだ

その日、俺は大總統直々に銀の懐中時計を授かった



「随分と遅かったじゃないか」

空が夕焼けで茜に染まるころ俺はオリヴィエを呼び出して

彼女には俺が国家錬金術師の試験を受けた事すら話していない。

サプライズと言う物だ

「まあ、野暮用でな」

「お前が時間にルーズなのはとうの昔に知っている。その理由がいか
がわしい物じゃないのを祈るばかりだ」

「まだ引きずるか、お前」

六年前のエロ本事件を未だに引きずっているらしい

オリヴィエの返事に苦笑いをしつつポケットから銀時計を取り出
しオリヴィエに突き出す

「やり遂げたぞ。俺の十六年の努力は無駄じゃないって証明した」

銀時計を見ると彼女は目を見開いた。正に俺が見たかった表情だ

俺が国家錬金術師になったことを理解するとオリヴィエは今まで
に無いほどの笑顔になった

「一言ぐらい言ってくれとも良かっただろうに。驚いてしまったじゃ
ないか」

「それが目的なんだよ。お陰で大満足だ」

俺の返事にオリヴィエはクスリと笑う

「でも流石は私の婚約者だ。私の想像の斜め上を行くとはな」

「いや、これは全部お前のお陰だ」

そう。今までの努力はお前のためにしてきたものだ

「お前のお陰で努力することが出来た」

お前が居なかったら俺はどうの昔に挫けていた筈だ

「お前が励ましてくれたお陰で俺は前に進むことが出来た」

お前が居なかった俺は何も出来ずに立ち止まっていた筈だ

「お前が居てくれるだけでもう少し頑張れると思った。だから――」

そう言っただけ俺は彼女の前で跪いた

「これからも俺の隣で支えて欲しい」

そして俺は小さな箱を取り出し彼女の前で開いた

そこには大きなダイヤのはまっている綺麗な指輪が鎮座していた

そして俺は最後の言葉を言うために息を吸い込む

たったこれが言いたいが為にこれまで努力してきた

そう思うと色んな感情が押し寄せてくる

そして心を落ち着かせ俺は遂に言葉を発した

「俺と結婚してください」

その時のオリヴィエの顔が赤く染まっていたのは夕焼けのせい
じゃないはずだ

遂にこの日が来た…

やあ、その非リアの皆。この前、リア充の仲間になったローガンです

ん？「おめえ、一度も非リアになった事ないだろ」だって？

…確かにリアルは充実してたな、訓練的な意味で

そんな訳でオリヴィエと無事結婚しました

まさか俺があんなクサイセリフを言う日が来るなんて夢にも思わなかったわ

でもそのお陰でオリヴィエの照れ顔を見ることが出来て、更にその場で返事を貰ってプロポーズ成功という偉業を成し遂げた

それに俺のセリフもこの世界ではクサイセリフじゃなくかなりロマンチックなセリフだったらしい。オリヴィエも自分の友達に自慢して羨ましがられたと言っていた。俺はそんな事よりもオリヴィエに友達がいたことに驚いていたが。でも口にしたらその場で斬られると思うから口にはしない

そしてプロポーズから一か月ぐらい経った日、アームストロング邸で結婚式を上げた。この国には国教が無いから教会が存在しない。宗教があつたとしても民族的なものだったりレト教みたいな胡散臭いやつしかない

まあ、教会でしようが家でしようが俺は小さく慎ましい結婚式にしたかつたんだよ。目立ちたく無いからね

でもアームストロング家が絡んでる時点で小さくなる筈がなかった。アームストロング邸には無数のリムジンっぽい車が停まっついてその中から如何にもお偉いさんっぽい人とその執事が下りてくる。アームストロング家の人脈舐めてたわ

客人が皆お偉いさん方だから緊張して死ぬかと思ったよ。貧乏ゆすりは止まらないし、心臓はバックバク跳ねるし、挙句の果てに胃の中の物リバーズしそうになるし

てか何でオリヴィエは平然としてるし。流石名家の長女だな。慣

れてやがる

オリヴィエ、そんな目で俺を見るな。俺が普通なんだからな?!この状況で平然しているお前の方がおかしいんだからな?!

その後、新郎新婦入場して、誓いのキスして、ケーキ切って……もう色々やった。本当に疲れたよ

それにしてもまさか大総統が来るとは思わなかったね

俺が見つけて近づいて挨拶したら豪快に笑って「いろいろと頑張りましたまゑ」って言われた。イロイロって何のことだろうね。十二の事だろうけど

そんな感じで結婚式も無事に終わった



「ローガン、筆筒はここでいいのか?」

「いや、もう少し右……そう、そこ」

今、俺たちは新居に引っ越ししている

まさかアームストロング家が新しい家してくれるとは思わなかった。流石金持ち、嫁入り道具の規模が違う。実際は俺が婿に入ったんだね

そしてオリヴィエは実家からメイドを一人も連れてきてない。メイドが居ると俺が怠けるといえるのがオリヴィエの談だが、俺の推測だと俺との二人だけの時間に水を差したくないというのが本当の理由だ……と思いたい。そう考えた方がオリヴィエが可愛く見えるだろうか?だから家具の整理も全部自分達でやらなきゃいけない

「ん?ローガン、この砂場はなんだ?さっきまで無かっただろう」

「あ、それね。なんに使うか見せてあげる」

オリヴィエは庭に出来た俺の作った砂場を見てそう言った
俺も彼女の隣に近づき座り込む

「これはこう使うんだ」

そして両手を砂の上に乗せ錬成を始める

すると砂が盛り上がり街を模したジオラマが現れる。そしてそこにゴ○ラに似た怪物が現れてそれを錬金術師が退治していく。前世で見た特撮さながらの光景がこの小さな砂場で繰り広げられている。こんな錬成ができるのは今はまだ俺ぐらいしかいないだろう

「どうだ、オリヴィエ。こういうのは子供が喜びそうだろう？」

俺がドヤ顔でそう言うが何故かオリヴィエから返事が来ない。オリヴィエの顔を覗き込むと興奮した様子で目の前の劇に夢中になっていた

子供かつ！

いや、この世界には娯楽が少ないから分からなくもないが、何でうちの嫁はこんなに少年趣味なのかね？未来には子供たちと並んで一緒にこの砂劇場を眺めている様子が簡単に思い浮かぶ。ん？なんかオリヴィエ可愛くね？何時もの厳しそうな顔が綻んで目をキラキラさせている姿とか鼻血出るかと思っただ

俺はその後オリヴィエが正気に戻るまでずっとオリヴィエの顔を眺めていた

因みにこの砂劇場にもう一つの目的がある

それはこれを使って子供を教育することだ。そして絶対にアームストロング家みたいな脳筋にはさせない、絶対にだ！

あれ？アームストロング家の血が入っている時点で無理か？無理

かあ（諦め）



引っ越しが終わって一か月ぐらい経った頃、俺はオリヴィエと買い物に出ている

俺達の家にはメイドが居ない、という事は自炊をしないといけないという事だ。そこでオリヴィエが名乗りを上げた

「これからは私が料理を作ろう」

全俺が泣いた。まさか愛妻料理と言う物を食べられる日が来るとは思わなかったからね。前世では彼女いない歴〓年齢だった俺がここまで扱ぎつけた事に涙ぐんでいたが今思えばアームストロング家の人間に料理を期待していた過去の自分を全力で殴りたい

肉

肉しか出ないのだ

俺が彼女に注意する日まで毎日朝昼夜肉料理しか出ない。それも野菜は抜きで

冷蔵庫のぞいたら真っ赤な肉しかなかった時の俺の気持ちがお前らに分かるか？自分の家が精肉店かと勘違いするかと思ったよ、まじで

こんな食生活なのに一切問題が起きないオリヴィエを見て「流石はアニメの世界だ（ボソツ）」って呟いたのは記憶に新しい

と言うよりそんな食事に二か月も耐えたた自分を褒めたい。恋つて盲目って本当だね（混乱）

そんな訳でこれからは俺が料理することになった。前世でも度々料理してたし問題ないはず。二十年以上のブランクはどうするかって？大丈夫だ、問題ない。知ってるか？料理は愛情を込めると美

味しくなるらしい

そして今日はそのための買い出しという訳だ

「ローガン、ここは二手に分かれた方が早くないか？」

「ん？今日なんか用事あつたか？」

「そういう訳ではないんだがな。効率よく時間を使ったほうが良いだろ」

まったく、オリヴィエは何も分かっていないな。こうやって二人で来たんだから買い物デートしないとダメだろ。早く終わらせて帰る方が時間の無駄だ

いや待て。もしかしてオリヴィエは早く家に帰ってイチャつきたって事なのか？なくんだ、そうならそう言ってくればいいのに、照れ屋だな↑考えすぎ

「分かった。んじゃオリヴィエはこのリストに載っている物を適当に買ってきてくれ」

俺がそう言うのとオリヴィエはリストを持って行った

この世界の買い物事情を少し言うところの世界にはスーパーマーケットとみたいに全ての物が一か所で買える場所がない。だからかなり歩かないと買い物が終わらない。そういう意味ではオリヴィエの選択は正しいといえるだろう

「おっさん、これとこれ適当に袋に詰めてくれ」

「まいど〜」

こんな感じで買い物をしているとオリヴィエが帰っていた。両手に買い物袋を持って走ってくるオリヴィエも可愛い。だがその買い物袋の中に一つ不審な物を見つけた

「ちよ、待った。オリヴィエ、袋の中のそれはなんだ？」

俺はそれを指さしてそう言った

「もしかしてプロテインの事を言っているのか？」

「戻してきなさい」

思わずお菓子を持ってきた子供を叱るオカンみたいな事を言ってしまった

「プロテインは必需品だろ」

誰だ、うちの可愛いオリヴィエにそんな事教えた奴。……十中八九あのモアイしかないだろう。クソ、あの家はどんな教育をしているんだ！

「違うからな。絶対に、誰がなんて言おうと違うからな。神だろうが俺が否定する」

「だが私をもっと強くならないといけないのだ」

「いや、もう十分だろ。てか女の筋肉ムキムキな姿なんて誰得だよ」

「私は女の前に軍人だ」

「残念だったな。お前は軍人の前に俺の嫁なんだよ」

そして俺たちは互いに睨み合った。双方の目には絶対譲れないという意思が籠っていた。そして両方が折れないと分かると俺たちは互いに叫んだ

「決闘だ!!」

結局、買い物から帰ってきた俺たちは直ぐに模擬戦をした

多分世界初じゃないだろうか。結婚して初めての喧嘩の原因がプ

ロテインの夫婦なんて

結果的には俺が珍しく勝った。国家錬金術師になった時よりも嬉しかった

オリヴィエは悔しがっていた……なんて事はなく俺の余りにも必死な様子に少し引きぎみに

「……次からは自重する」

それだけ呟いた

こうして家の食事情は改善された

それから数か月後、軍の将校がイシュヴァール人の少女を殺害したという情報が耳に入った

嗚呼、始まってしまうのか

イシュヴァール殲滅戦が

逃げるんだよオ!

ハガレンの世界で一番救いのない場面は何処だと聞かれればシヨウ・タツカーのキメラ事件と同列にイシユヴァール殲滅戦が挙げられるだろう。そして物語の序盤から後半までに影響を及ぼす重大な事件だ

そんな超重要イベントの発端端である軍将校による射殺事件

実際にはこの事件自体が偽装で、本当は後でグリードの仲間になるドルチェットやマーテルが所属している特殊部隊がイシユヴァール人を襲撃したのが事実だけでも、そんな事は今はどうでもいい問題はイシユヴァール殲滅戦がもうすぐ始まるという事だ

正直に言おう

何も考えてなかった、てへぺろ

やめてえええ!! 石を投げないで!!

だって仕方ないだろ。訓練とか研究とかで忙しかったんだから

国家錬金術師になったのもオリヴィエと結婚するためだけに頑張ったから先の事なんて全然見てなかったし

それに原作読んだのがもう二十年も前だから原作の出来事も忘れがちなんだよ

言い訳はここまでにして、本当にどうしよう

書類上俺は研究者扱いされているから戦争に呼ばれないとは思う。だがマルコーのような医学方面に特化した錬金術師も呼び出されているから絶対に呼ばれないなんて言う確証はない

それにお偉いさん方が俺の流体錬成に目を付けないはずがない。試験の時に見せた龍を相手に向かって飛ばすだけでもそれなりの威力があると想定できるだろう。まあ、実際には俺の手を離れた瞬間に崩れ落ちるけどね

という訳で考えれば考えるほど俺の徴兵の確率が上がっていく
やばいなあ。まじでどうしょ…

もうこのまま国外にでも逃げようかな……
ん？国外？

この世界ってアメストリス以外の国も存在してるよな？アニメでは外国の描写がなかったから分からなかったけど

調べてみると確かに四方に一つずつ国を確認することが出来た

北はドラクマ。不可侵条約が結ばれてるがメツチャ仲が悪いらしい

南はアエルゴ。国境線で小競り合いが絶えない

西はクレタ。アエルゴと同様に小競り合いが絶えない

東はシン。砂漠を超えた先にある国で錬丹術という独自の技術を持つているらしい

…シン以外の全ての国と争ってるじゃん。大丈夫なの、うちの国？
いくら軍事国家だからって全ての国に戦争吹っ掛けなくても良い
だろうに

他の国が協力して攻めてきたら流石に錬金術あってもキツイと思うけど

これで分かったことはもし国外に逃げたとしても受け入れてくれるのはシンしかないって事だ

いや、よく考えてみれば戦争が終わるまでシンに逃げるのも悪くない

シンの錬丹術を研究するという理由ならば軍も認めてくれるだろう

それにアメストリスは戦争に集中してるから海外との交流も少ないから、もし俺が錬丹術を覚えればこの国での錬丹術の第一人者になれる

さらに軍将校がイシュヴァール人の少女を誤って殺害したのも軍内部で秘かに囁かれているだけでまだ戦争の予兆はない。今ならまだ間に合う

思い立ったが吉日という訳ですぐに上司のグラマン少将に聞いて

みると

「いいよお。行つてきな」

あつさりと許可をくれた。この爺さん、部下にも優しいから本当に相手しやすい

「あ、それとオリヴィエも連れて行つても？」

「いいよお。夫婦で楽しんできな。それとお土産忘れないでね」

「向こうの酒でも持つてきますよ」

「という訳でシンに旅行に行くから支度して」

「帰ってきたらいきなり何を言い出すんだ、お前は。それに私には仕事が——」

「上官命令だ！付いて来い！」

「この前国家錬金術師になったばかりの貴様が上官命令とは。国家錬金術師様様だな」

「権力つてこう使うもんでしょ。それにグラマンの爺さんにも許可は取つてある」

俺がそう言うとおリヴィエは声をあげて笑い始めた

いや、分かるよ？俺に偉そうな態度が似合わないってことぐらい。でも笑う事はないでしょう

「グラマン少将に許可を得ているならば何も問題はない」

「ならいいんだ。そうと決まりや早く支度すんぞ。出来るだけ早く行きたいからな」

「落ち着けローガン。まったく、貴様は子供か」

と言いなながらもオリヴィエも結構期待してる顔なんだよね
それじゃあ、ちよつとだけ遅れた新婚旅行としやれこもうか



数日後、俺たちは無事にシン国に到着した

車で砂漠越えしたけど意外と楽しかったね。砂丘の上とか走ると
アトラクションみたいで退屈しなかったよ

シン国に到着するとフーと呼ばれる老人と他数名が迎えに来てい
た

「出迎え(ご)苦勞様です」

「はるばる遠い国から良くぞお越しになりました」

互いに挨拶を済ませるとすぐに案内された

ちよつと思ったことがあるんだけど、この国の服装とか建物とか
メツチャ中国じゃね？いや、確かに似たような文化を持つ国があつて
も不思議じゃないけど世界観が完全に違うというか違和感が半端
じゃない。もしかしてこの世界って他の作品とのクロスオーバー
だったりする？でも俺の知っている作品の中でシン国なんていう場
所なんて聞いたことがないんだけどなあ

そんなことを考えていると目的地に着いたらしい

この周辺は彼らヤオ家が治めている領地らしくこの中でだったら
ある程度自由に暮らしても大丈夫だとのこと

その日の夜は歓迎会とのことでキャンプファイヤーを囲んで宴つ
ぽい事をしてもらった。なんか理由をつけて騒ぎたかっただけかも
しれないが。この国の踊りやら料理やら披露されてかなり盛り上
がった。

そんな中、フーの爺さんが一人の赤ちゃんと二歳ぐらいの少女を紹介してくれた

なんと赤ちゃんはこの国の皇子らしい。名前はリン・ヤオ。平伏したほうが良いのかななんて考えてるとこの子はシン国の第十二皇子だからそこまで偉いわけではないとのこと。子供が数十人いるとか皇帝頑張りすぎでしょ。そんなに沢山いたら後継ぎ問題とか大変だろうに

そして隣の少女はフーの孫娘で名前をランファンというらしい。外国人を初めてみるのか俺たちの事をじーっと見つめている。正直メツチャ可愛い。少し喋ってみると子供らしく好奇心旺盛でアメストリスについて色々聞いてくる。一方的に聞かれるのもなんだから此方からも「大きくなったら何がしたい？」とテンプレな質問をするところ答えた

「大きくなったらわかを守ってあげりゆの〜」

グハッ！

まさかシン国がここまで危険な生物兵器を隠していたとは。思わず抱きしめちゃうとこだった。危ない危ない。どうにか頭をナデナデすることでその欲望を抑え込んだ

おい、フーの爺さん。そんなドヤ顔で俺を見るな。ランファンが可愛いのは分かるけど

そしてオリヴィエ。そんな物欲しそうな顔で俺を見るな！そんな顔されたら色々と奮発しちやいたくなるだろうが

結局その日は酔いつぶれるまでフーの孫自慢を聞いていた

無理ゲーだろ、これ…

このシン国に来た建前としての理由は錬丹術の研究だが、本当の目的はイシュヴァール殲滅戦の徴兵の回避と同時にオリヴィエとの新婚旅行だ。だが例え建前だとしても錬丹術には興味があるし是非研究してみたいとも思っていた

だけどまさか

「すまないがヤオ家には錬丹術に精通している術師はいないんだ」「え?」

しよっぱなから躓く羽目になるとは思わなかった

話を聞くと代々錬丹術の達人を生み出すチャン家という一族が存在するらしい。だがヤオ家と仲の悪い一族が俺たちの事を押し付けた。ヤオ家も最初は反抗していたが向こうの一族の方が格が高く最終的には渋々受け入れる羽目になったという

そんな事情があるなら仕方ない。逆に押し付けられたのにも関わらずこんなに優しく接してくれてることを感謝しないといけないと思う

という訳で結果的には書物オンリーでの独学となってしまうた

なんか初めて錬金術勉強した時のこと思い出すなあ。六法全書モドキを一日中凝視しながら重要なところをメモしていたあの時が懐かしい

もちろん本は全部シン国語、というか中国語なので通訳をお願いしてもらった

少しずつ読んでいくと錬金術とそれなりの共通点があったが根本的な所に違いがあった

まず錬丹術は医学に秀でていること

もう一つは龍脈の力を使っていること

そして最後に一番重要なポイントは遠隔錬成ができるということこの遠隔錬成にはさすがに驚いた。そして幾多の可能性を感じた

これさえあれば流体錬成の大きな欠点の一つの『手を離すと崩れる』というのを補うことが出来るかもしれない

こうしちゃいられない。早く遠隔錬成を試さねば
えーと、なにになに？

その一 陣を書いてその陣の端に五角形になるように鏢を刺す
鏢ってたしか中国版のクナイみたいなものだったよね？オツケー
分かった

その二 他の場所に鏢を同じ形で刺す

その三 その一で書いた陣を発動させればその二で鏢を刺した場所で錬成が起きる

なるほどね。龍脈の力を利用し鏢を媒体にして錬成されるみたいな感じかな

……ちよつと待て。これ一体どこで使うの？使い道あるか、これ？
いや、中国四千年の歴史をベースに作られたこの国の術なんだ。なにか俺には思いつきそうもないマリアナ海溝より深い理由があるはずだ。よく考えろ、俺！

えーと……あつ、ドツキリとかに使えるんじゃないやね？前世のユーチューバー達が喜びそうな使い方だな、ははは（棒）

実戦じゃ罨ぐらいにしか使えねーじゃねえか

翻訳さん、この遠隔錬成って実戦に使われることってありますか？

え？よく使われる？どうやって？

え？鏢を投げて使うの？それも道具とか使わないで手で？

つまりこの遠隔錬成を実戦で使うためには

その一 陣を書いてその陣の端に五角形になるように鏢を刺します

その二 自分が錬成したいと思った場所に鏢を五つ投げます。この時、鏢はその一で刺した鏢

と同じ五角形を描かなければならない

その三)その一で書いた陣を発動させればその二で鏢を刺した場所で錬成が起きます

無理ゲーじゃねえか!!!

鏢を五本同時に投げてそれが丁度五角形になるなんて絶対人間業じゃない

いや、待てローガン!

思い出せ!永遠と丸を書き続けたあの頃を!あれと同じだと思えば乗り越えられるはずだ

そうだよ。遠隔錬成をマスターすればこの世界での生存率も上がるはず。そう思えば安いものだ

うおおおおおおお!!いけええええ、ローガン!!お前なら出来る!

次の日、前腕が筋肉痛でペンを握めなくなったのは言うまでもない



シン国について数か月が経った

最初は色んな所に観光に行ったり色々体験したりして楽しんでいた、が

「暇だ」

うちのお姫様が暇を持て余しているらしい。流石にもうここでも来ることはやり尽くしていてネタ切れ状態だ

でもアメストリスでは丁度開戦して帰国する訳にもいかない
さてどうしたものか

「何かしたい事とかある?」

「どうせ今は帰れないのだろうか? ならば体が鈍らなように訓練でもしない」と

流石アームストロング家の長女、海外に来てても全然ブレないな

という訳でフーの爺さんに訓練できる場所があるかと尋ねたら自分たちが毎日している訓練に参加しないかと誘ってくれた

なんとこの爺さん、代々ヤオ家の長を守ってきた一族らしい。俺やらしたらただの孫が大好きなだけの好々爺でしかないんだけどね

後日、オリヴィエと一緒に訓練に参加したがそこで衝撃の事実が明らかになった

フーの爺さんって忍者だったんだよ

この国って中国をベースにしてたんじゃなかったのかと思うだろうけど爺さんの服装とか動きとかが完全に忍者のそれなんだよ

なんかアメリカの漫画にありそうだよ。なんか良く分かんないけど中国っぽい舞台なのに主人公が忍者みたいな。忍者とか侍とか大好きだけどよく分かってなくてステレオタイプだけで描いたような漫画

そして気っていうのを使って体を強化したり索敵したり出来るらしい。教えてくれるっていうからメツチャ期待しながら聞いてたら体の中を流れるエネルギーがなんちゃらこんちゃらと訳分かんないこと言ってたから理解できなかった。前世でサブカルチャーに慣れ親しんだ俺でも分からないものだからオリヴィエには更に理解できていないらしく説明中はずっとイライラしていた

気の事はゆっくり覚えていけばいいか

こうして俺の日課に訓練が加わった

それから四年の月日が経った

時間が過ぎるのが早すぎるかと思うかもしれないが俺って学者体質なのか何かに没頭すると時間を忘れちゃうんだよね。この四年間もかなり短く感じた

この四年間で俺はほんの少しだけ気を活用できるようになった。気で体を強化するのは俺には合わなかったらしく気で索敵する練習に切り替えた。おかげで集中すれば半径数メートルぐらいはボンヤリと他の人の気を読めるようになった。オリヴィエは全然出来てなかったけど

そして錬丹術はまったく進歩がなかった

錬丹術も錬金術と同じく術は発動するけど手を離すと崩れてしまう。遠隔錬成の方は言うまでもなく全然出来てない

まあ、錬金術も十数年かかったしこればかりは焦ってもしょうがない

ヤオ族の将来のリーダーであるリン・ヤオ君も今年で四歳になった。赤ちゃんの時から『お目目はいつ開くのかな』なんて言われてたけど開くことはなかった。目が開かないんじゃないかとあり得ないまでに糸目なだけだが。本人も開いているつもりらしい。一度、出来るだけ大きく目を開けてほしいと頼んだ時があった。尋常じゃないほど目つきが悪かった。君はもう一生目閉じてた方がいいと思うよ、うん。

ランファンも六歳になった。今は若の護衛になるために爺さんにしごかれている。目の前でこんなに必死に訓練しているのを見ると、この子がいつか脳筋になってしまわないかと不安になってしまう

そんな感じでゆっくりと暮らしていたが異変と言う物は突然とし

てくるものだ

「ローガンさん。アメリトリスから軍人さんが来ていますよ。ローガンさんに会いたいですって」

ある日突然、アメリトリスから軍人が派遣された
もしかしたら戦争が終わったのかな？ 四年も経てば戦争も終わる
でしょう

と淡い期待を胸にやってきた軍人と対面した

『流鉄』の錬金術師、ローガン・アームストロング殿でしょうか？
「そうだ。こんな所まで遙々ご苦労。それで要件はなんだ？」
「はっ。大総統閣下直々の伝令を持ってきた所存であります」

そう言うと目の前の軍人は丸められた一枚の羊皮紙を俺に渡した
嫌な予感がピリピリする中、俺はゆっくりと紙を開いた

『流鉄の錬金術師ローガン・アームストロングは直ちにセントラルに
帰還しイシユヴァール殲滅戦に参加することを命ずる』

え？